

新しく農村に求めたいもの

富山県農村医学研究会 越山 健二

日本の農業、農村、農家はいま人類が生存して以来の大きな変化の中にあると思う。農村医学研究会は農業、農村、農家を対象として四十年間保健医療の研究とその実績を行い、富山県農業村医学会も組織化されてから二十年を経過した。この時代はまさに激動の時代であり、発足当時に多発していた農夫症や寄生虫症などは影をひそめ農薬、機械災害、栄養等に関する保健、医療問題へと移りつつある。近年は更に精神や心の衰弱が明らかになっており、身体の不健康より精神面や社会面の不健康が指摘されるようになってきた。

ヒト科動物が地球上に現われたのは、数百万年前ともいわれ、四本足から二本足で起立し、猿人から直立原人、しゃべる人間から知恵のある人間へと進化してきた。直立した事によって手を使い道具を造り、火を使い、言葉で情報交換を行うようになった。人間は自然環境を上手に利用し、適応する事で文化を創り、あらゆる生物の霊長として繁栄してきたのである。わずかに二、三万年前に一定の地域に住みつき大地を耕し、種子をまき、水をあて除草をし収穫し、それを貯え、四季折々の労働をして文化を育て生活を営んできた。この様式は長年持続し今日に及んでいると言う。

しかし大戦後、日本では農業に大きな変化をもたらした。それは二十世紀の科学・技術の発展の影響もあり、農業は人力から機械化がすすみ、化学肥料、農薬、除草剤等の使用によって作業形態、経営方式が一変したのである。国の主流産業であった第一次産業は第

二次、第三の産業へと転換し、農業は兼業となり、農業人口も極端に減少してきた。特に富山県は約97%が兼業で占められ、農産物も多様化し米以外の作物も四季を通して栽培されているようである。このような変化に伴って農家、農村も変貌し、高度の経済の発展成長に伴って生活も豊かになり、従来の農業に対するイメージは消失したように思われる。

有史以来、農業は自然のまにまに四季を友とし気楽な作業を繰り返し、人口も少なく競争もない時代は生活様式も単純で粗末な暮らしに満足していたが、時代が進み封建的社会の農業は、かがまり仕事、手作業、冷え、低栄養、不潔、気嫌ねなどから慢性疲労が蓄積し、農夫症が多発したのは僅か四十年ほど前までの事である。その後機械化、省力化により農業は兼業となり農村医学研究の対象は農夫症から作業様式の変化による機械災害、騒音、薬物中毒、ハウス症、アレルギー疾患へと様変わりしてきたのである。

注目したいのは例年豊作で米が余り、所得の高上もあって食物に対する恩恵の気持が薄くなり、天地に対する敬愛の気持ちが衰弱してきたように思われる。

農業は日々の農耕の中で天地の恩恵を知り、感謝、報恩の気持を育て、生命の尊厳や衰敬、生存秩序など体得出来る尊い仕事で民族の基本とすべきものだと思う。

いま農業で失いつつあるものは、長い間培ってきた伝統的な人間性ともいべき自然に対する恩恵とそれに対する感謝報恩であり、共存するための協力や忍耐であり、有限の物

に対する愛情と儉約の気持ちである。消費は美德の時代を終らせ「もったいない」という言葉の復活をのぞみたい。

科学、技術の発展は、重厚長大、軽薄短いとめぐるしく、宇宙科学のマクロから遺伝子のマイクロにいたるまで大きな夢を画く中で、

時代は高齢化や国際化が加速され、地球規模で人類の生存が問われているのである。

失われ、衰弱してきた人間の心、いきいきとした人間性、それは農業の中にこそ生きづき、それが求められているように思うのである。